

本田財団レポート No.92

「エジプト文明からみた地球環境」

早稲田大学教授

吉村作治

財団法人 **本田財団**

講師略歴

吉村作治 (よしむら さくじ)

早稲田大学教授



《略歴》

1943年東京都に生まれる。カイロ大学考古学研究所留学。早稲田大学第一文学部卒業。

1966年以来、早稲田大学古代エジプト調査隊を組織し発掘を開始。1974年には、ルクソール西岸にて「魚の丘」遺跡・彩色階段、クルナ村の貴族墓に於いて200体のミイラや未発見貴族墓を発見し、1987年にはクフ王のピラミッド内の未知の空間や第2の「太陽の船」を発見した。

現在は、王家の谷・西谷や、ラムセス2世の王子の葬祭殿の発掘調査等いくつかのプロジェクトを手がけている。又、1996年3月にはダハシュール北地区に於いて人工衛星の画像解析により遺跡を発見するという世界で初の快挙を成し遂げた。1998年3月には同遺跡から重要な遺物が多数出土し、今後の発掘が期待されている。

エジプトでの調査、発掘活動の他、エジプト文化を広めるため早稲田大学古代エジプト調査室の友の会「ピラミッドクラブ」を主宰し、広報誌の発行、研究会の開催などの広報活動も行なっている。

現在、早稲田大学教授、早稲田大学古代エジプト調査室室長

《主な著書》

「エジプト発掘30年」(平凡社)

「超古代ピラミッドとスフィンクス」<吉村作治の文明探検1>(平凡社)

「ツタンカーメン ファラオの都テーベ」<吉村作治の文明探検2>(平凡社)

「君はピラミッドを見たか」(近代文芸社) 他 多数

このレポートは、平成11年5月24日パレスホテルにおいて行われた第79回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

私のフィールドはエジプト

いまご紹介いただいたように、エジプトが私のフィールドです。考古学というのはただ土を掘って何かを見つければいい、何かを見つけだと考古学が成り立つような、そういう感じを皆さんお持ちなんですかけれども、実は考古学というのは目的学問でありまして、発掘というのはあくまでも方法論です。ですから、実際に何を見つけるかというのをまず自分たちで設定して、その見つけようと思っているもの、これにどういうふうにしたらいかという方法を立てて、その方法で行く、というのがというのが最近というか本来の考古学です。

日本では考古学が文学部に所属していますので、文科系の学生が集まってしまうがないんです。ですから数学が苦手、物理や化学がいやだという連中が多くて、実は考古学では数学とか、物理とか、化学とか、地理とか、地質とか、こういうものが圧倒的に必要なんですけれども、そのへんのところで大変困っております。平行線はなぜ交わらないかというのを証明するのはまったく苦手でありますし、平行線が交わらないことすら知らないやつが弟子に多くて大変困っております。(笑)

ハワード・カーターの発掘物語に感動して

私が子供のときに読んだエジプトの本で、当時のほとんどのエジプト学者が今から 100 年近く前に認めていなかったツタンカーメン (Tut-ankh-Amen) のファラオの墓があると信じて、小学校しか出ていなかったハワード・カーターというイギリスの青年が、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学の教授たちの嘲笑のなかで、ついに彼らの鼻をあかせて見つけたのです。その小気味よい発掘物語に大変感動しまして、ちょうど 10 歳でしたけれど、こういうおじさんになろうと思いまして、そのおじさんになってしまったという非常に単純な人生であります。(笑) もうすぐ死ぬでしょうからそれで終わってしまうという……。見方によると「よかったね」と言う人と、ほとんどほかの体験もなく終わってしまって「寂しいね」というふうな評価もあります。

カイロ大学留学3年で発掘権取得

前回、東海大学情報技術センターの坂田先生がお話しになつたと伺いました。私は実際にエジプトに初めて行ったのは1966年ですが、その時に10年がかりで発掘権を取ろうと思いまして、カイロ大学の考古学研究所に留学しました。そこで一生懸命頑張った結果、3年で発掘権が取れました。それで発掘をしていたのですが、最初は、発掘の地域は地割りが決まっているという世界でして、そこへは入って行くことができなかつたんです。

欧米の発掘隊は今から30年前に170年近い実績がありまして、1798年のナポレオンのエジプト遠征の時から始まっているわけです。私は1966年に初めて行きました、そのころ日本にはエジプト考古学をやっている人はいなくて、オリエント考古学をやっていた川村喜一先生にお願いして、オリエントのすぐ近くなんだからエジプトもやってくださいということで、学生が先生にお願いして専門を変えていただいたのです。

それで始めたものですから、何とか中に入つて行こうというのでいろいろな国と交渉をするんですけども、既得権を放したくないものですから、みんないい顔はするんだけどもなかなか場所を譲ってくれない。アメリカがたまたま非常に広い地域を持っていたのでお願いしたら、快く、このワジ（涸谷）から向こうを発掘していいということになり、エジプト政府も、アメリカが言っているのならいいだらうとなりました。

発掘を開始して3年間何も見つからない

そんなところから始めて、1970年に発掘権を取つて、71年から本格的に始めたんですけども、3年間何も見つからなくて、もうだめだと思いました。文部省の科学研究費を申請して3年の試験研究というのを取りましたが、3年目になつても出ない。これはもうだめだなと言つているときに、発掘に使つていた労働者的人夫頭に、もう来年は来れないかも知れないと、終わりまであと1週間ぐらいのときに言つたんです。

すると「どうしてですか。3年やつても何も出ないからですか。日本人はせっかちだから、結果が出ないものはだめなんですか。それなら言っていただければ、出るところがあるんです。」と言うのです。（笑）そういうことは先に言ってほしいですよ。

宿舎というのはものすごい狭いところで、教授からずっといましたので、朝出るときに

トイレが一個しかないので、われわれはトイレを使わずに砂漠の現場に行きました、合間にトイレに行っていたんです。それには砂漠で見えちゃいますから、ちょっと盛り上がりしている丘がありまして、その陰に隠れてみんなしていたんですが、その丘が怪しいというわけです。(笑)

何で怪しいんだといったら、その丘の名前がコム・アル・サマク、魚の丘で、砂漠の中で魚の丘という名前はおかしいじゃないかというのです。たしかにおかしいのでこれは遺跡だというんです。すごく短絡しているなと思ったんですけども、溺れる者は藁をもつかめ、というのでやりましたら、3時間で遺跡が出た。(笑) それが1973年度、すなわち1974年1月15日のことです。

もしそれが出なければ、今ごろ皆様の前でお話をすることもなかったと思います。そのあと私の指導教官で教授だった川村喜一先生が1979年に亡くなられまして、カイロ大学に留学していたときに「すぐ戻れ」という電報が来たんですけども、ちょうど1日前に、このまますっとここにいても食っていけない、何とか正業につかなきゃいけない、家族も正業につけと言ってコンスタントな収入を望んでおりましたので、たまたまあある新聞社がエジプトの特派員を募集しているというので、面接に行きました。日本の会社ですけれども、そこで面接を受けて、オーケーというので合格書をもらって、いよいよ生まれて初めて就職だというわけで喜んでいたんです。

名誉を取るか、正業につくか

そしたら大学から電報が来て、すぐ戻れというわけです。10分ぐらい考えましたね。正業を取るか、名誉を取るか。すぐ決めまして、大学に戻ると言いましたら、約束が違うというので家族は怒りました。そこで早稲田に戻ってきました。

呼ばれたんだからきっと教授だろうと思ったら、講師だという。まあ講師でもいいかなと思ったら、その上に三つ付いていまして、非常勤。(笑) これは話が違うなと思い、やっぱり向こうの新聞のほうがよかったと思って、文句を言ったんです。そしたら「いや、君は非常勤講師ではない。非常識講師だから大丈夫だ」というようなことを言われて、だまされてのまますと非常識講師だったんです。

川村喜一先生が亡くなられてから、どうやったら200年近く進んでいる欧米の調査団に仲間に入れてもらえるかを考えました。考古学はすばらしい遺跡を見つけることにはだ

めなわけです。道路工事や地下鉄工事だと、掘ったあとそれが使えます。地下鉄の電車が走るとか、高速道路に自動車が走るとか。われわれは掘ったあと何も出ないと、じゃまですから、その中に人が落ちたり馬が落ちたりすると一大事になるので、もう一回埋め直さなくてはいけない。それは実に寂しい話なので、見つけると名誉ですけれども、見つからないときには本当にコソコソと、しかもそのお金はだれが出してくれるわけではなくて、自分のお金でやらなければいけないわけです。

何とか見つける方法はないものか

そういうことがありまして何とか遺跡を見つけなければいけない。見つける方法はないものか。これは絶対に科学技術しかない。物理探査しかないと思い、初めて電気探査というのをやろうと早稲田大学に資源工学という、石油とか石炭とか鉱物とか水とかを探す大変いい学科があるのでその先生に相談したところ、「任しておけ、電気探査がいい」とおっしゃるのです。

「電気探査というのはどういうのですか」「電気というのはプラスからマイナスに行くだろう。こっちから電気を流してシューッと行ったら、その行った距離と速さでもって、タイムラグでもって調べるんだ」。「それはいいですね。絶対にわかりますか」「わかるよ」ということで、その先生をエジプトに連れて行つたんです。

そしたらしばらくしてから、「吉村君、これはだめだな、エジプトは」「どうしてですか」。「砂漠というのは電気が流れないので」。そんなの最初からわかっているじゃないか。先生、それはひどいねと言うと、「いや、ぼくはエジプトを一度見たかったんだ。再来年定年だからね」とかなんか言われてすっかり引っ掛かってしまいました。(笑)

その先生はとってもいい方で、「せっかくピラミッドを見せてもらつたし、いろいろ神殿も見たから、いいことを教えてあげよう。電磁波がいいんだよ。私の友達で電磁波をやっている人がいるから、電磁波をやつたらいい。」と言うのです。このときに初めて物理探査というのがどういうようなものか、電磁波は何か、磁気探査は、というのを全部教わりました。

それで電磁波地中レーダーというのを作りまして、やりましたらこれが非常に当たりがよくて、それ以来百発百中ではないですけれども、ほぼ当たったんです。それで有頂天になつてしましました。

最先端の科学は勘が大事

そしてある時、前回お話しされた坂田先生にお会いしたら、「君は遅れてる。そんな電磁波なんてはいざり回ることは、もうだめなのよ」。「いや、はいざり回ってませんよ。自動車にちゃんと付けています」「そういう問題じゃない。もう今は一発でわかるのよ」と言われた。「どうするんですか」「人工衛星の画像を解析するとパッとわかる」「どうしたらいいですか」「これはお金がかかるんだ。君、金持ちをだましてきなさい」。だますこととはできないから、協力をお願いして、ご一緒にやらせていただき、4年間下準備をして、1996年3月に砂漠の下約1メートル40センチぐらいのところに間口が25メートル、奥行きが50メートルのトゥームチャペルという神殿が付いている大型墳墓を見つけたわけです。

その遺跡を砂漠の下から見つけたというのは世界で初めてですから、坂田先生の大ヒットであります。ただ、それを見つける、ここにあるぞと言われて見つけないと私の責任になっちゃいます。私はほとんど「ここ掘れワンワン」のポチみたいなもので、(笑)「ここだぞ」と言われたら、そこで何とか見つけなければいけない。その「ここだぞ」というのが500メートルから1キロ平方なんです。それは大変なものなんです。あとはどうするんですか。勘だよ、君と言われて、(笑)最先端の科学は勘がいちばん大事だということがわかりまして、ぼくはすごくうれしかったんです。

そして坂田先生のおっしゃる場所で見つかった。これだけだとわれわれ寂しいですから、この中に何かなくてはいけない。そこからまた掘っていきましたら、ちょうど真ん中のところの13メートル下に部屋が七つ見つかった。そこから私が小学校4年の時に読んだツタンカーメンの指輪が出てきた。これはエジプトでツタンカーメンの墓以外では初めてです。お墓の中からファイアンス製の指輪は七つしか出でないんですが、われわれは一つ見つけたのです。

アンセケナーメン王妃の指輪を世界で初めて発掘

もっとすごいのは、ツタンカーメンの王墓の中にもなかった王妃のアンセケナーメンの

指輪を見つけたことです。これは世界で初めてですから、坂田先生が大変喜んでくれまして、「君、運だな」。要するに科学技術の次は勘で、その次は運だということがわかりました。(笑)なるほど、さすが科学者というのは観点が違うなという感じです。大変ほめていただきました。君は運がいいと言われて、大変うれしかったです。

その七つの部屋から 4000 点ばかりの遺物が出てきました。なおかつ大変ありがたいことに、普通地上で発掘しますと土器なんかはだいたいクシャッと壊れています。壊れているのをそっと持ってきて、きれいに洗って、こうやって付けるんです。速い人でだいたい 3 時間ぐらいで付けるのですが、遅い人だと 1 週間ぐらいかかります。地上だとそれがバラバラになっている場合が多い。100 個ぐらいつないで、こっちのものがあっちへ行ったり、あっちのものがこっちへ行ったりしているんですけど、地下ですからクシャッとなったとき、その周りの破片を持ってきますと、同じ土器のものがいっしょにあるんです。土器片は足があって歩いていくわけにいかないですから、そういう面ではたくさんのいい土器を見つけました。そこだけで 400 例ぐらい。一つのお墓から 400 例ぐらいの壺が見つかったというのはほとんど初めてに近くて、それが大変よかったです。

そうこうしていたら、どうもミイラやいろいろなものの破片なんかが見つかるのですが、このお墓の持ち主というのはイパイという名前でちゃんと建物に記されていました。エジプトの場合は必ず建物を建てるときに王の名前をスタンプで押すんです。それが中にありました。

イパイの墓所か？

われわれが見つけた遺跡は下エジプト、カイロから約 30 キロぐらいのところで、そこはいまだかつて歴史に出てきてない所なのです。さらにイパイという名前も出てこないです。上エジプト、カイロから 700 キロぐらい南に行ったところでは何例かそういう名前が出てきています。すなわちイパイという人は上エジプトの人で、何かの事情があって下エジプトに移ってきて、そこで亡くなられて大きなお墓をつくったと考えられます。

間口が 25 メートル、奥行きが 50 メートルというと、王様の墓にかなり近い。上エジプトは「王家の谷」といいまして、涸谷のところにトンネルを掘ってお墓をつくるのですが、下エジプトはそういう涸谷がありません。それで砂漠を掘りまして、岩盤までいったところに、石や日乾レンガを積んで、その上に建物を建てて、表面を石でコーティングするん

です。上の部分はもちろんとられているのですが、土台のところが見つかって、そこに名前が残っていたのです。そしてそこからツタンカーメンの指輪やさらに150年後のサムセス2世の名前がある遺物も出ているのです。

ここでわかるることは、イパイは少なくとも今から3400年ぐらい前にツタンカーメンと親交のあった貴族であったこと、そして墓を作ったけれどもそのあと何回か盗掘が行われて150年後の時代に再利用されたということです。今から3250年ぐらい前の時代のラムセス2世の指輪が出てきていますから、その人物が王からもらっているわけです。王からお前はよきやつだというので指輪をもらって、それを大事にしまっていて、死んだときに家族がお墓に入れるということになっているわけですから、これもまた地位の高い人だなと考えられるのです。そのほかにも何回か再利用されていることがわかっています。

何とか玄室を見つけよう

すなわちエジプトのお墓というのは一回使われると、150年から200年するとそれを全部きれいにして、いかにも新しい人のもののような顔をして再利用するんです。これはお墓に限らず神殿でもみんなそうです。王宮に関してはみんなつぶしてしまうので、なかなか名前が残らないのですが。そういうことでこれはかなり大物の墓でした。しかも歴代何回か使われています。何とか玄室を見つけようと思いました。13メートル下のところの七つの部屋は玄室ではないらしい。玄室には必ず石棺があって、石棺の中には木棺があって、木棺の中にミイラが入っていて、その周りにたくさんの副葬品、アクセサリー、家具などがあります。未盗掘で1922年に見つかったツタンカーメンの墓が一つの典型です。それを夢見て私は今から約45年前に始めて、そういうものをイメージトレーニングではないですけれども、頭の中に持っていますから、そういうものを探しに探していました。そして、1997年はそこまでいかなかつたんですけども、98年3月に、どうももう一つ下がったところに地下二階があるらしいことがわかり掘ったのです。

ファイバースコープはすごい

丁度3月だったので、タイムリミットでどうしても大学は4月にいないといけない。そこで帰る前にたまたまNHKの方が持ってきていたキトラ古墳で中に入れたファイバース

copeのカメラを使うことにしたのです。

テレビ局の人はすごいなあと思いましたね。そういうこともあると思って持ってきたというんです。それでこうやって中に入れましたら、そこにすばらしい石棺らしいものが見える。去年の12月にお話をいただいた折に失礼にも日本にいなかったのは、その大切な現場で必死になって自分で掘っていました。めったに自分では掘らない。イギリスの発掘法が身にしみているんです。

イギリスでは「旦那発掘」なんです。旦那というのは、要するに考古学者は偉いわけです。ツタンカーメンを見つけたハワード・カーターは小学校しか出てないんですが、一応イギリスの人ですから、非常にきっちつとしていて、発掘現場でタキシードを着て蝶ネクタイをして山高帽を被っているんです。バカじゃないかとぼくは思うんですが、そういう発掘なんです。隊長とか団長というのは自らの手で発掘をやってはいけない。椅子に座って日傘の下にいて、何か本を読みながらパイプをくゆらせて、「どうかね」なんて時々言うというのが大事らしいのですが、こっちは昔から下っ端で来ましたから、現場に行ってやっていたわけです。

やっぱり盗掘されていた

掘っていました、ついに12月13日にお棺のところまでたどり着いたんです。お棺の蓋が少しずれていたんですけども、ふたが閉まっていますから、これは未盗掘かもしれないと思ったんですが、残念ながらミイラの4分の3が盗掘されて、4分の1残っていました。その他木のお棺の破片とか、ミイラの上に被っているマスクとか、そういうものが全部出てきたんです。

ずいぶん丁寧な泥棒がいるなと思いました。盗ったらそのまま逃げればいいのに、あの入たちは捕まつたら死刑ですから、何でふたなんか閉めていくんだろう。これが一番の疑問だったんですが、一つの木、正確に言うと二つの木から理由がわかったんです。二つの木は一つなんです。一つはお棺の中から出てきた。一つはお棺の外から出てきた。それを二つ取り上げてみるとくっつくんです。年代がたっていますから多少壊れていますけれども。

これは泥棒が4トンもある石棺の蓋を持ち上げるため、少しずつ根気よくてこを使ったと考えられます。少し入れて木をかまして、また隙間を大きくして木をかましてとやって

いくと、だんだん上がっていくんです。われわれはジャッキでやると 10 分ぐらいで上がるんですが、相当時間をかけたんでしょう。それで隙間を作り中を盗っていたときに何らかの、例えば警護の人が来たとか、朝日が昇ったとか、何かあったんでしょう。そのまま袋に入れて……。ぼくはやったことがないからわからないんですが、だいたいの想像ですよ。

われわれは同じようなことをやっているんですけども、正しい立派なことをやっていると思っていますから、電気をこうこうとつけてやっていますので、ベンベン草も残らないというぐらいにきれいに取ってくるんですが、泥棒というのはともかく急いでいるのでパパッと盗っていくんです。それでそのまま 1000 年とか 2000 年経って、4 トン半の重さに耐え兼ねた木はパキッと割れたんでしょう。それであたかも未盗掘のようにみえたのです。まあ、人騒がせな泥棒だと思います。われわれはそれで約 7 か月間、未盗掘かもしれない、未盗掘のはずがない、未盗掘に違いない、はずがない、この二つをあっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら楽しみました。考えてみると、そのドロちゃんには大変感謝をしなければいけないと思うんですけども、結果的には 4 分の 3 、大腿骨の右半分ぐらいのところが残っていて、遺物も 100 点ぐらいのものが残っていました。

ラムセス 2 世の 3 番目の宰相の棺

そのような発掘をして、いよいよ今度は、実はこのお墓自体はイパイのものだと先ほど申し上げましたが、そのお棺が何とラムセス 2 世の宰相、総理大臣だったメスという人のものでした。古代エジプト語ではメス、ヘブライ語ではモーゼです。あのモーゼと同じ名前の人で、モーゼと戦ったラムセス 2 世の総理大臣はカエムワセトという人で、この人の遺跡は電磁波地中レーダーで 1991 年、あの湾岸戦争の後に見つけたんです。そのカエムワセトという人とほぼ同じか、ちょっと後の総理大臣にメスという人がいて、その人のお棺を見つけたわけです。ラムセス 2 世は治世が 68 年もありましたので、全部で 3 人の人が総理大臣をやっているんですが、その 3 番目の宰相のお墓だったんです。

2 番目のカエムワセトという人のはすごい遺跡です。まだ墓は見つかっていませんが、葬祭殿は見つかっています。25 メートルなんてものではなくて、間口が 70 メートルぐらいで、真四角になっていますから、奥行きが約 70 から 80 ぐらいの大きなものです。そこも掘っています。そしてとにかく来年の冬には、ダハシュール遺跡でイパイの玄室を見つ

けようと思っています。「イパイを探せ」ということで、準備しているのです。

環境問題を考える視点

今日の題の「エジプト文明からみた地球環境」ということですが、環境問題というのはいま大変皆さんに興味があるテーマです。私などは現代の環境問題というのは、専門家ではありませんから、現代のことについてとやかく言う立場にもないんですが、われわれ環境を考えるときにきちっとしたものの考え方をしてないのではないかと思うんです。それはどういうことかというと、環境を考えるのはとても大切だし、自動車の排気ガスを少なくして空気中のCO₂を少なくする。または石油で生だきしている発電を少なくするとか、その他いろいろなものも大事だと思うし、私は何の反対もないのですが、考える視点がどうも自然を中心に考えすぎています。

自然というのはほとんど人間に負けたことはない。逆にいうと人間が500万年の歴史の中で自然に勝ったことはめったにないんです。今もほとんど自然には勝てないです。何が問題かというと、自然にもいい自然と悪い自然がありますし、強い自然と弱い自然があります。われわれは悪い自然とか強い自然にさんざん悩まされてひどい目に遭って、今でも地震の予知すらもできないような状態で、人間というのはあらゆる自然に能力が劣っているわけです。

唯一人間が勝てるものは考える力、創造する力ぐらいのものでしょう。駆け足をしたらネズミにも追いつけない。いくら空手が何段と言っても亀の甲をなかなか割ることはできない。それではどうするかということから始まったわけで、脳みそなんかほとんどないような鳥だってスイスイ飛んでいるのに、われわれは大げさなことをして飛んでいるふりをしているだけです。飛んでいるわけではない。飛んでいるものに乗っかっているだけですから、それを「われわれは空を飛ぶようになった」なんて自己弁護しているわけです。鳥なんかはそんな大げさなことを言わなくたって、生まれてしばらくするとヒヨイヒヨイヒヨイと飛んで行っちゃうですから、とてもかなうわけがありません。

人間は自分に対してフレンドリーな自然を痛めつけている

そういった自然の中で今大きな問題というのは、人間に対してフレンドリーな、やさし

い、なおかつそんなに力を持ってない、そういう自然を人間が自分の欲望のために痛めつけてている。痛めつけるだけでなくて、今後このまま行くと自分たちの命も危うい。人類の歴史が閉じてしまうかもしれない。これを防ぐ方法は人間の英知、人間しかない。自然が主役ではなくて人間が主役で、人間が自然環境を守るんだということです。

決して地球の主人公は人間だと思ってはいけない、なんてことはとんでもない話で、サルにこのまま全部お願いしたって、絶対に自然環境をよくすることは出来ない。ましてやすべての動物、植物、鉱物と言われる自然が、人間を幸せにすることも地球を守ることもできないだろうと思います。

もともと人間はどんな苦しみを持って自然に対してやってきたか。いつの時から人間は自然というものをきっちり自分の仲間として認識しなくなってしまったのか。どこにそういう観点があるのか。

未来を考えるときには、現在というのではないわけですからね。現在は瞬時に過去になつていって、未来を食いちぎっているわけです。その食いちぎる未来もいったいどこがどうなんだかよくわからないでいるのが現状です。だから過去にすがるしかない。過去の中で、その過去の状態、過去というのは原因もあれば、行動もあれば、プロセスもあれば、結果も出ている。それがある人の特定の個性によって行われる場合もあるし、その個性のように独特のように見えても実は法則がある場合もある。そういうことで過去を見ていかなければいけないです。

500万年の人類の歴史を見なければならない

今こそ本当に未来の人間、人類が 100 年、 200 年単位ではなくて万年単位で続いていくことを願うならば、500 万年の人類の歴史を見なければいけない。500 万年のうち 499 万年近くはほとんど原始的な世界で生きているわけですから、第 6 氷河が終わった今から 1 万 2 、 3000 年前ぐらいから考えていかないといけない。その前はいくら考えたって、時には人間が人間を食っていた時代もあるし、死んだらどこかに捨てていた時代もありますから、そういうものを学んでもしようがないので、だいたい第 6 氷河、最終氷河が終わつたぐらいから、いったいわれわれはどういう過ちを犯してきたか、どういういいことをやつてきたか、ということを考えていくのがいいだろうと思います。

前段がすごく長くなりましたが、それでエジプト文明から地球環境を考えようという命

題が出ました。ほとんどこれで終わったようなのですが、(笑) スライドを持って来ましたので、スライドをやりたいと思います。



エジプトの地図

これはエジプトの地図です。先ほどからお話しているのはダハシュールというところです。カイロは全体に広い街で、人口が約 1400 万人ぐらいあるんですけども、ちょうどそれと対峙している、ナイル川を渡って西側にギザというところがります。このギザには皆さんご存じの 3 大ピラミッドがあります。

ダハシュールはこのギザから約 20 キロほど南に行ったところの砂漠のど真ん中にあったわけです。ああいうラッキーなことが起きるというのは、一昨年までこの地域は軍事基地の中にあったのですが、たまたま軍備縮小ということで、軍隊が撤退したため、発掘が出来ることになったのです。この発掘はなるべく新しい国に分けようという考えがエジプト政府にありまして、もらいました。

そこから 700 キロぐらい行ったところにルクソールというところがあります。日本でいうと京都・奈良ですね。そこからしばらく行きますとアスワンです。

エジプトはナイルの賜物である

ナイル川というのは長さが 6700 キロで、地球で今いちばん長い川ですが、そのうちの 2000 キロ近く、1800 キロぐらいがエジプトの部分です。そしてエジプトはナイル川に沿つてのみ緑地があります。すなわちギリシアの歴史家ヘロドトスが、「エジプトはナイルの賜物である」と言っていた意味は、ナイル川の周りにしか耕作地はなく、あとは砂漠です。緑地 1 に対して砂漠は 9 です。すなわち国土は緑地の約 10 倍あるんです。日本の国土全部が 38 万平方キロメートル、エジプトの緑地が約 40 万平方キロメートルなので、長さといい、広さといい、ほぼ日本と同じです。ただ、砂漠がその 9 倍ありますので、日本の約 10 倍という大変大きい国です。あと、オアシスがいくつかあります。



アレキサンドリア

典型的なところを観光案内しますと、これがアレキサンドリアというところです。ここ の建物はカイト・ベイといい今から千二、三百年前に建てられた砦ですが、現在は軍事博物館になっています。実は古代7不思議の一つにファルスの灯台というのがありまして、それよりももっと前の500年ほど前は、ここのところは海ではなくて陸地だったのですが、地震が起きましたで陥没して、ここは港になったんです。その前にはここにクレオパトラの住んでいた王宮があったんです。

水中考古学は金がかかって大変

フランス隊が今この湾の中で発掘をしています。水中考古学というんです。水中考古学は大変楽しそうに見えるのですが、隊長さんにお聞きするところによると、お金がかかって大変なんだそうです。ダイバーは1日2時間しか潜れない。そうするとスペアのダイバーをいっぱい持ってなければいけないので、大変なのです。ダイバーを考古学者にするのは大変難しいんだそうです。ダイバーはダイビングをしているだけで楽しいんだそうですが、考古学者はダイビングを楽しんでないで見つけなくてはいけない。考古学者をダイバーにしないといけないんだけれど、考古学者はダイバーにならない。役に立たないと いうことを嘆いておりました。(笑) ほくのことを言っているのかなという感じがあります。

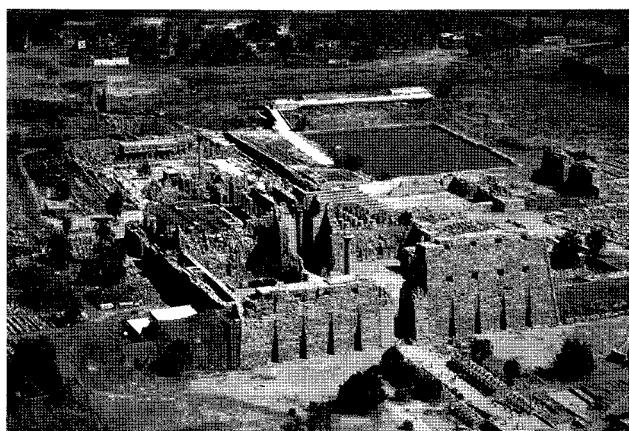
水を掘るというのがちょっとよくわからないんですが、湾のだいたい5メートルぐらい 下のところにずっとあるんですね。何千あるんだかわからない。それはそうですよ。みんな土に潜っていますから。

ルクソールは日本の出雲



ギザのピラミッド

これはそこから約 200 キロ南に行ったところギザのピラミッドで、皆さんご存じのケフ王、カフラー王、メンカウラー王という王たちのピラミッドです。



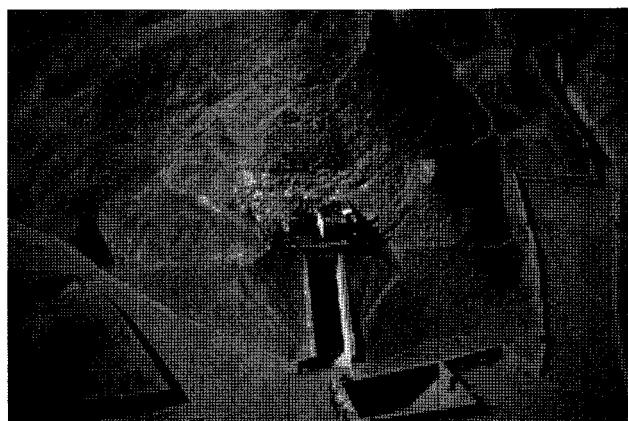
ルクソール

そこからまた 700 キロ行ったところにルクソールというところがあります。ルクソールという名はアラブ名です。ギリシア人はここをテーベと言いました。アラブ名のルクソールという名はどういう意味かといいますと、たくさんの城のあるところ、これをアラブ人は城壁、城門と考えたんです。こういうのがたくさんあります。単数形で城のことをカッスルと言いますが、その複数形がアルクスール、それがなまってルクソールとなったわけです。ギリシア人はここをテーベ、テーバイと言いました。どうしてテーバイと言われたかというと、自分たちの古都であるテーバイに似ているからです。

古代エジプト人は何と呼んでいたかといいますと、ワセト。ワセトとはどういう意味かというと、神々がたくさん集まるところです。1年に1回神様が全部集まって、ここで儀式をする。神様が集まるといつても見えません。神が見えるなんて言うと大槻義彦先生に怒られますので、見えないということにしておきますけれども、そういうことで日本でいふと出雲みたいなところなんです。このところに神様が集まる。ですからこの神殿は全

部神様の部屋です。

実際に神様は見えませんので、古代エジプト人も人々が集まても神が見えないと困るので、神様の彫像を造りまして、置いたんです。2万体見つかっています。そうするとそのところにあの世から神様が来て、ヒュッと入る。ずいぶん幼稚だなとお思いの方もいらっしゃると思いますが、日本もけっこう幼稚です。子供の頃お彼岸の時に木を折って燃やして、煙が立って、「何してるの」とお母さんに聞いたら、「この煙に沿ってご先祖様が来るのよ。そのまま仏壇に入るの」なんていうのとほぼ同じだと思って間違いないと思います。

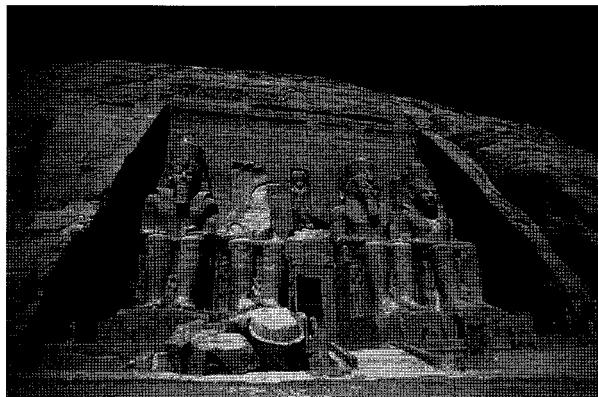


ツタンカーメンの墓

ルクソールの西岸には「王家の谷」というのがあります。これが私があこがれていたツタンカーメンの墓です。今まで王家の谷でみつかった王墓は62あります。いまだ発見されていない墓があると七つぐらいあるんです。見つかっていない墓とか、これはだれだれの墓と言われているけれどもそうではないとか、その七つぐらいを約20か国で競争して探しています。私ももちろんその中に入っています。

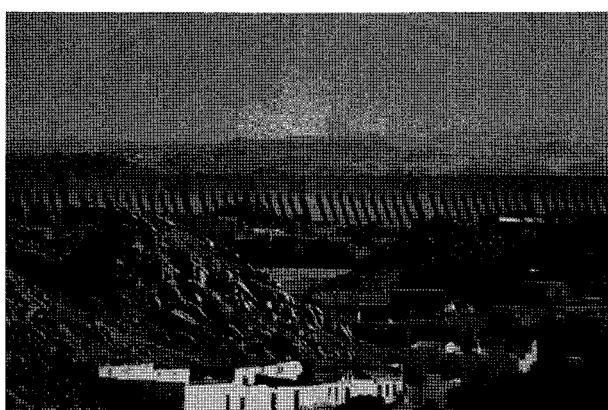
貴族の墓を見つけるのはわりと簡単にできますが、王様の墓、ファラオの墓はなかなか見つかりません。坂田先生と固く誓い合っているのは、ピラミッドを見つけることと王様の墓を見つけることです。それを今やっております。

古代エジプト文明がエジプトの環境を守ってきた



アブ・シンベル

そこからまた 500 キロぐらい行ったところに、エジプト最南の遺跡アブ・シンベルがあり、ラムセス 2 世の岩窟神殿があります。もっともこれはアスワン・ハイダムによって沈められそうだったので、全部壊して上に建て替えた、再建したものです。この中は空洞でドームになっています。



アスワン・ハイダム

いろいろ古代エジプトの環境というものを考えるときに、古代エジプト文明がエジプトの環境を守ってきたといえます。しかし現代のエジプトがそれを壊してしまった、ということの端的なモニュメントがこのアスワン・ハイダムです。これはアブシンベルの 300 キロほど手前のところに造されました。

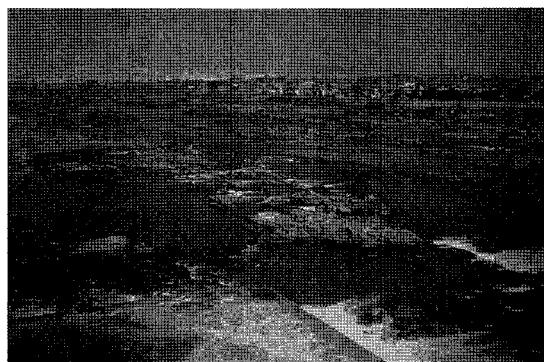
造った理由は、アスワンのナイル川が同じ川でも川床がずっと上に上がっていて、そのところに石を置き塞き止めると、上流から約 5200~5300 キロ流れてきた水がここにたまって、大きな湖ができる。その水を利用して灌漑をする。電気をつくる。電気をつければ、その下流約 1000 キロ近いところに住んでいる人たちに、近代生活の元になる電気が配電できるだろう。そういうことで 1952 年に革命を起こしたナセル大統領が、60 年代の初め、アスワン・ハイダムを造って、そして工業を興そうと思ったわけです。

その当時エジプトというのは 4200 万人から 4500 万人ぐらいの人口があったわけで、こ

のまま行くと 5000 万人、6000 万人、7000 万人と人口が増えるだろう。そのときには食糧も足らなくなるだろう。近代生活をするには当然電気が必要だろう。灌漑を行うことによって食糧を増やして、電気をつくることによって文化生活が送れる。その当時としては大変いい考えだと思います。

ナセル大統領は純真な方でありますから、本当に国民のためを思った。実際にずっと古代からナセル大統領がこのハイダムを造るまで、エジプトはなすがまま、ナイル川が氾濫すれば氾濫したまま、氾濫が止まれば急いで種を蒔いて、そしてじっと待っていると 4か月たつと大麦や小麦ができる。それを刈り取って、みんなで分配して食べてきた。言ってみれば近代社会から見ると、いい言葉で言うと非常にゆったりとしている。悪い言葉で言うと出遅れている。それを変えようということですね。

人間の考えることはたかが知れている



キャタラクト

ところが人間の考えることというのはたかが知れているということなんですけれども、これは川底が出てきている。こういうところだからこそダムが造れたんだという一つの例で、キャタラクトといいます。日本語で急湍とか急流とか訳しています。

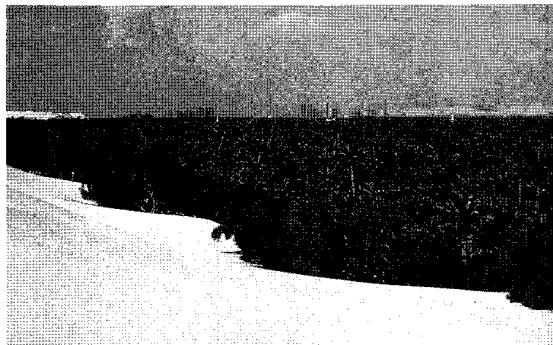
古代エジプトではナイル川が氾濫するのを予知するためにナイロメーターを付けて、この季節で水がここまで来た。そうするとあと 1 か月後にはこれぐらい来る。そういうことがはっきりわかるので、その予測のもとにいろいろなことをやっていたわけです。今はアスワン・ハイダムで水が止められていますから、これはまったく使いものにならない。本当に遺物になってしまっています。



現在のナイル川

ナイル川が氾濫するとどのくらい水が氾濫するかといいますと、これは今のナイル川です。これが緑地です。この緑地のところまで全部水が氾濫します。ここのところ、これが低位砂漠です。そして高位砂漠があります。緑地まで全部水が入りますから、その間農業が全然できません。

ナイル川が氾濫しなくなつて、中にどんどん家ができるようになって緑地をつぶすようになった。氾濫しているうちはこういうところをつぶすことなく、上に住んでいたわけです。1年に1回の一毛作です。アスワン・ハイダムで水を止めますと2毛作になる。生産量は倍になる。単純計算でそうなるわけです。ですから農業生産が倍になるとえたんですけども、そなは問屋が卸さなかつた。



防砂林

これを見ていただくとわかりますが、1年に1回必ずこのところまで水が氾濫していました。そのために砂はこんなに来なかつた。これは防砂林です。これは2年ほど前に撮った写真ですから、今年はこの防砂林はおそらく枯れています。もっと前にはここにありました。

砂の中の塩分が木や草を枯らす

砂漠というのは水がないから木が育たない。これは当たり前のことですが、水がただ単にないだけではなくて、この砂の中にたくさんの塩分を含んでいるわけです。この塩分が

いけないわけです。実はここに水をまけばまくほど、この砂に含まれている塩がこっちへ流れ込むわけです。皆さんもご存じのように塩というのは水に溶けやすい。溶解しやすい。水に引っ張られる。水が大好きなんです。そして水にしがみついて行きますと、この木の濃度よりも濃いものが引っつきますから、水が蒸発すると木のところに塩がピタッとくっつくわけです。そして木の中にある水分を吸収するわけです。塩は水が好きですから。

本来、木というのは地中にある水を吸い上げて上まで上げていくわけです。そして葉っぱの先まで行って、そこから蒸発することによって人間が生きているように生命体を保っているわけです。それが逆流するわくですから、どんどん枯れるわけです。そうやって枯れしていくわけですね。最初のうちは木材ができてよかったですという程度ですが、もうここまで行くと悲惨な状態です。

実際問題として、ここは運河ですが、ナイル川の支流というか、ナイル川から水を引いて、農地に水を配っている。こんな悠長な、今は観光名所であります、非常に少ないです。今はほとんど日本が売ったりあげたりしている揚水ポンプでやっておりますから、これも非常に大きな問題ですが、土地が吸い過ぎて水が足らなくなってしまうんです。



シャドウフ

このぐらいのことでのんびりやっているのがよかったです。シャドウフというのですが、今や観光名所になっています。



これはサキーヤというもので、日本でいうと水車です。日本の水車は脱穀したりするのにも使いますが、この水車は、こう流れている運河の水を、こういうふうに流すための水車です。これも今はほとんど観光名所になっていまして、実際には使っていません。

サキーヤ



どういうことになるかというと、こういう状態になります。水があると土の中にある塩が出てきて、ここに成育している草や木がなくなってしまう。廃土になってしまいます。



それだけではなくて、実際に遺跡の中にも塩を含んだ水が出てきて、水だけが蒸発してこういうふうに、これは塩の塊です。こういうふうになってきています。



われわれの発掘しているところですから、修復しなければいけない。これは応急処置なんです。パクッと剥がれますから、とりあえず仮止めしているんですが、これではすみません。この岩盤にしみ込んできた水を塩抜きしないといけない。いったいどういうふうにするか。大変なことであります、ユネスコと共同してどうしたらいいかということを、研究チームを作ってやっております。

アスワン・ハイダムで伏流水が地表に

どうしてこういうことが起きたか。すなわちアスワン・ハイダムで水をためました。長さが 600 キロぐらい、幅が平均して 30 キロから 40 キロぐらいある。最初は高さ 62 メートルぐらいのところで止まるだろうと思っていたら、62 メートル来ない。どうしてこなったかというと、涸谷、ワジのことを考えなかったので、そっちへ水がどんどん流れて行った。すなわちものすごい荷重が上流側にかかったわけです。

ナイル川の地中海との接点にデルタ地帯がありますが、そことアスワン・ハイダムのところまで約 1200 キロぐらいあります。その 1200 キロの行程の間で高低差が 100 メートルないんです。96~97 メートルしかない。そのところに 62 メートルの水がたまっているわけですから、このプレッシャーはすごいです。それまで地下何十メートルの伏流水があったわけです。砂漠といっても 30 メートルとか 50 メートル下には必ず水が流れています。ですからカナートといって、ご存じのようにイランとかアフガニスタンではときどき穴を開いていて、その下を水が流れています。これが伏流水です。

その地下 30 メートルとか 40 メートルを流れていた伏流水が、プレッシャーを受けましたから全部上に上がってくるわけです。毛細管現象をご存じですね。毛細管現象で上がってくる。水というのは蒸発しようとしますから、地表まで上がってくるんです。その間ずっと地下にあった塩を全部溶かしながら上がって来て、蒸発する瞬間に塩を置いて行っちゃうわけです。そうすると土の上にさっき見ていただいたような塩がダーッと残る。

少なくともアスワン・ハイダムができる前、ぼくが初めて行ったのは 1966 年ですが、1966 年にはまだアスワン・ハイダムができていません。74 年に完成しましたので、まだ完全にはできていなかったので、まだまだ氾濫があったんです。遺跡のすぐ手前のところまで水が来ていて、ああ、昔はこの水を利用して石を運んで積んだんだなというのがわかるような状態だったんです。

もう今はまったく氾濫はありませんから、水が上に上がってきてしまう。もしダムがなければ、1 年に 1 回、4 か月、上流の水が流れてきて氾濫しますから、あんな塩はどうつてことはないんです。全部下に流して、地中海の塩分が高くなるだけです。どんどん、どんどん流していたわけです。海の塩分が高くなつたってたかがしれているわけです。

1 年に 1 回この水が土をきれいにして、なおかつ上流からアビシニア高原とかスーザン南部のサッド地帯から運んできたものを置いていった。だから肥沃な土地で、それをナイ

ル・シルトと呼んでいたわけですが、これがなくなったわけです。

下から塩は上がってくるわ、その塩は洗い流さないということになりますと、循環しなくなるわけです。それまで農業で一切肥料もやらずに植えていたのが、土地が疲弊しますから、肥料を入れなきゃいけない。アルカリ性が強くなりますから、酸化剤を入れて中和しなくてはいけない。そういうことで土地がどんどん疲弊しますから、二毛作になったけれども一毛作のときより収穫量が悪くなってしまった。そうすると土地を太らせるためのまた処置をする。全部それは科学的な人工的なものでやらざるを得なくなったのです。

このままではエジプトの農業は壊滅する

極端なことを言うと、心臓はだれだれ、肝臓はだれだれ、腎臓はだれだれ、皮膚だけ自分のものというようなことになるのと同じなんです。全部他人のものでやっていくということになります。ですからこのままで行くとエジプトは農業が完全に壊滅してしまうのではないか。何とかしなければいけないというので、今いろいろな方策、プロジェクトを立てているようですが、大変悲惨な状態です。



スフィンクスも、こういうふうに下から水が上がって来て、だめになってきています。いちばん怖いのは首が落ちることです。怖いというよりも、ここに8ミリビデオをセットしておいて、落っこちた瞬間を撮れば、世界中に高く売れるのではないかと思うんです。 (笑) フィルムを入れ換えたりなんかするのが大変でしょうけれど。

そういうことで、何を私が皆さんにお話ししたいかというと、システムというものが歴史の中にあって、システムを変えるときには相当なフィージビリティスタディをやらないといけないのではないかということです。よく考えますと、4大文明の中で堤防を造ったり治水をしなかったのはエジプトだけです。ほかの文明はみんな治水が王たる資格だったの

ですが、エジプトの場合は治水をしないことが王たる資格だった。だから 3000 年もの間続いたわけです。

ローマは、われわれは大変印象的ですごいと思いますけれど、400 年間です。インダス文明は日乾レンガを焼いて、大変すばらしい街、モヘンジョダロなんてすごい町を作った。下水まであった。全部焼きレンガです。ですから焼きレンガを造るために周りにあつり木を全部切ってしまい、周りの木を切ったためにインダス川の水流が変わったわけです。それで放棄されてしまった。すなわち焼きレンガを造った文明というのは、最高でローマ帝国です。

エジプトではレンガを焼かなかった

エジプトは一切レンガを焼かなかった。最近は焼くようになったために大変だというので政府の命令で、一切レンガを焼いてはいけないし、土は燃やしてはいけないことになりました。土は土のままで置いておけということです。これは大変な英知でありまして、エジプトは雨が降りませんので、家は全部土で造っています。アドベ（日乾レンガ）です。造りまして、ご主人が亡くなりますと、子供はその後を継ぐのではなくて、違うところに家を造らなければいけない。そのために土地から土を取ってきます。そして枠に入れて日乾レンガを造る。それで家を造ります。

土を取ったところをどうするかというと、お父さんの家を壊して、その土をそこに戻してやるわけです。そうすると 20 年とか 30 年この土は作物をつくらないで、のうのうとサバティカルをしているわけです。そして別の所では作物をたくさん作っていますからが土が疲弊しているわけです。そして、それをうまく交互に行なって土を利用するのです。だから非常にうまく循環しているわけです。このシステムを変えると、あっという間に文明は衰退していくわけです。

よくエジプトに行かれると、どうしてあのピラミッドを造った人たちがこんなに貧乏なんだという人がいます。最近はだいぶ裕福になりました、さすがに裸足で歩いたり、パジャマで街を歩いている人はいなくなりました。昔は日本人が来るとうるさくてしょうがなかった。どうしてパジャマで歩いているんですか。ぼくは言いました。これがエジプトの制服だ。（笑） そういうするとその人は、ああそうですかと言っていましたけれども、パジャマというのはエジプトの言葉ですから、そこから来たんだと言うと納得するんだけれど

も、そんなことはない、ただ貧しいだけだったんです。 (笑) それがなくなった。確かに見た目はだいぶ裕福になってきたんですけども、実際の根幹的なものというのは非常に今危険な状態にあります。

古代文明から哲学を学ぼう

すなわち、地域とか土地とか気候とかそういうものを古代人は上手に取り入れているんです。だからといってダムを造るなとか、全部家は泥で作れと言っているのではないです。その土地土地の気候とか風土とか、そういう文化というものを大事にしていかなければいけないということと、もう一度社会を循環させることが大切なのです。子供の時に習いましたよね。大地の循環というのを考え直さないと、現代文明はそう長くなく終わってしまうだろうということです。

ぜひともわれわれはもう一度古代文明にいろいろな哲学を学ばなければいけないのではないかということを結論に終わらせていただきます。ありがとうございました。 (拍手)